【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（中学校用）

都道府県名	茨城県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	明野町立明野中学校					
学　年	１年	２年	３年	特殊学級	計	教員数
学級数	４	５	５	２	１６	３０
生徒数	１４８	１９９	１８１	５	５５３	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

基礎・基本の定着を図り，「確かな学力」を付ける指導の在り方
－評価と個に応じた指導の工夫改善を目指して－

２．研究内容と方法

(1)　実施学年・教科

基本的に国語，社会，数学，理科，英語の５教科で全学年で実施している。重点学年と教科は以下の通りである。

・１年生・国語
　学びの基礎・基本を身に付けさせるために重要な学年及び教科であると考え，重点学年とした。
・１年生・社会
　中学校の社会科学習において，技能面や思考面等学びの基礎・基本を習得させるために重要であり，社会科嫌いをなくすためにも早期に取り組むべきと考え，重点学年とした。
・２年生・理科
　内容的に観察や実験が多くなり，難しさが増すときでもあり，理科離れを防止する意味でも重点学年とした。
・２年生・英語
　内容的には難しくなり，生徒の取り組みや理解の状況に差が出てくる学年でもある反面英語のおもしろみがわかる重要な学年であると考え，重点学年とした。
・３年生・数学
　内容がかなり難しくなり，生徒の理解の状況に差が著しく出やすくなると考え，また調査結果からも重点学年とした。

(2)　年次ごとの計画

平成15年

○　テーマ
・　指導体制の工夫改善に基づく多様な学習形態や方法の研究及び教材開発とその実践
・　評価規準及び評価方法の見直しと個に応じた指導の工夫改善

○　研究の見通し（仮説）
①　各教科において多様な学習法や学習形態，指導体制等の工夫改善及び教材開発を行い，計画的に実施することでことで，生徒は「確かな学力」が身に付くであろう。
②　指導に生かすために評価方法の見直しを行うことで，個に応じた指導の改善が図られ，生徒は「確かな学力」の定着が図れるであろう。

○　研究の内容・方法
①　内容
ア　「確かな学力」を付けるための基礎・基本のとらえの明確化
・　学びの基礎・基本の定義付けと定着を図るための方策の検討
・　学習習慣の確立と学習方法の定着を図るための手引き等の作成
イ　発展的な学習や補充的な学習など個に応じた指導のための教材開発
・　意欲的な学習をうながすための教材開発

・　個別指導の充実を図るための教材開発（発展・補充）
・　発展的な学習や補充的な学習のための教材開発
・　補充的学習のために裁量の時間の活用
ウ　個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善
・　少人数指導やＴＴ導入を含めた多様な学習形態の研究（外部講師との連携も含む）
・　問題解決的な学習や体験的な学習などねらいを明確にした多様な学習方法の工夫
・　個に応じたきめ細かな指導の工夫
・　学習意欲を高める学習活動の工夫
・　幼・小・中・高連携による相互授業研究
オ　評価を生かした指導の改善
・　学習の到達度を確かめるための単位時間ごとの適切な評価規準の設定
・　確かな学力を付けるために適切な評価規準に基づいた個に応じた指導の手だての具体化
・　自己評価や相互評価の方法と活用の工夫及び生徒の評価能力の育成
・　評価と一体化した学習計画の工夫
・　評価テストとその生かし方の工夫
②　方法
ア　研究テーマ，研究内容，研究の組織，研究計画を立案し，推進体制研修計画を策定する。
イ　学習指導要領や実践事例，先進校視察を通し，上の研究内容に基づき学力向上対策について理論及び実践研究に努める。
ウ　国語，社会，数学，理科，英語について，教科ごとの相互授業研究や訪問指導を中心に，指導体制や指導法，評価の方法等について教科部会や研究部会を中心に研究を進め，実践すると共に，全体研修を行うことで共通理解を図る。

平成16年度	○　テーマ ・　単元全体を見通した指導体制の工夫に基づく多様な学習形態や方法の改善及び教材開発と計画的実施 ・　評価方法の見直しによる生徒の確実な実態把握と，それに基づく個に応じた指導による「確かな学力」の定着 ・　学力向上のための地域・家庭との連携の強化 ○　研究の見通し（仮説） ①　各教科において単元全体を見通した多様な指導体制を取り入れ，それに基づいた学習方法や学習形態の工夫と教材開発を行い，計画的に実施することで，生徒は「確かな学力」が身に付くであろう。 ②　評価方法の見直しにより生徒一人一人の実態把握を確実にすることで，個に応じた指導の改善が図られ，生徒は「確かな学力」の定着が図れるであろう。 ③　望ましい学習習慣を身につけるために，地域・家庭との連携を強化することで，学力向上が図れるであろう。 ○　研究の内容・方法 ①　内容 ア　学習習慣の確立と学習方法の定着を図るための具体的な方策の実施と手引きの活用 ・　家庭学習の手引きの実践的活用 ・　より良い学習習慣を図るための家庭との連携の強化 イ　発展的な学習や補充的な学習など個に応じた指導のための教材開発 ・　多様な学習形態・方法に対応し，単元全体を見通した意欲的な学習をうながすための教材開発 ・　個別指導の充実を図るための教材開発（発展・補充） ・　補充及び発展的学習のために裁量の時間の活用と教材の開発 ウ　個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善 ・　少人数指導やＴＴ導入を含めた多様な学習形態の研究（外部講師との連携も含む） ・　問題解決的な学習や体験的な学習など学習意欲を高める多様な学習方法の工夫 ・　個に応じたきめ細かな指導の工夫 ・　幼・小・中・高連携による相互授業研究

オ　評価を生かした指導の改善
・　指導体制や形態を考慮した年間指導計画及び評価規準の検討
・　確かな学力を付けるために適切な評価規準に基づいた生徒の的確な実態把握と個に応じた指導の手だての具体化（個人カルテの導入）
・　自己評価や相互評価の方法と生かし方の工夫及び生徒の評価能力の育成
・　評価テストとその生かし方の工夫

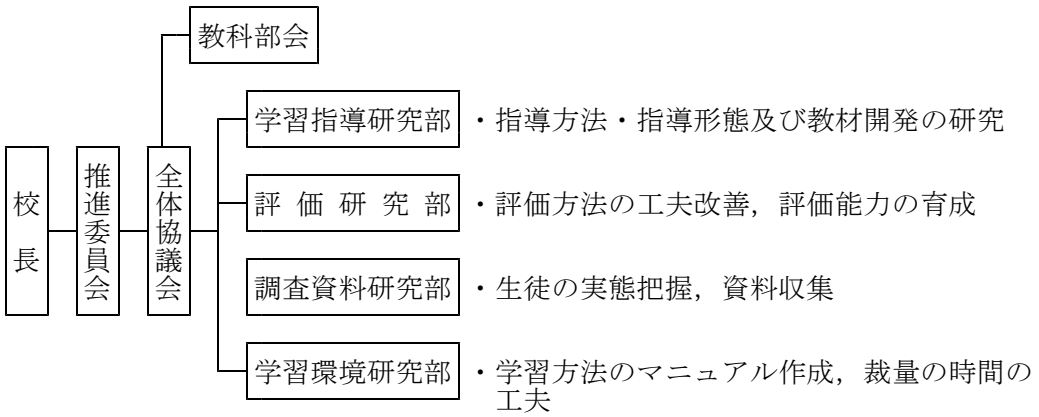
②　方法

ア　研究推進体制及び研修計画の見直しを図る。

イ　１５年度の研究結果に基づき，学習指導要領や実践事例，先進校視察を通し，上の研究内容について学力向上のための理論及び実践研究に努める。

ウ　国語，社会，数学，理科，英語について，教科ごとの相互授業研究や訪問指導を中心に，指導体制や指導法，評価の方法等について教科部会や研究部会を中心に研究を進め，実践すると共に，全体研修を行うことで共通理解を図る。

(3)　研究推進体制



Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

(1)　生徒の変容

○　１学期と２学期の評価を比較すると観点別評価で，関心・意欲・態度の面でＡの評価が伸びている教科が多い。これは，体験的学習や問題解決的な学習の導入及び評価カードへの教師の適切なアドバイス等により学習意欲が向上したためであると思われ，自ら学ぶ姿が身に付きつつある。

Ａ評価の伸び（関心等１，２学期の比較）

学年教科	伸び率
１年：英語	１６％
１年：数学	７％
１年：国語	５％
２年：国語	５％
１年：理科	５％

上位５つ掲載

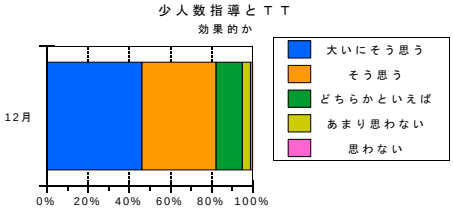
○　１，２学期の評定を比較してみると，１年の国語や３年の数学での評定４，５の割合の伸び率が高い。多くの単元で少人数指導やＴＴ等を導入している教科である。多様な学習形態の工夫にともなう教材を開発導入したことや評価を工夫したことで個に応じた指導の手だてが可能になり，基礎・基本の定着が図られた結果だと考えられる。

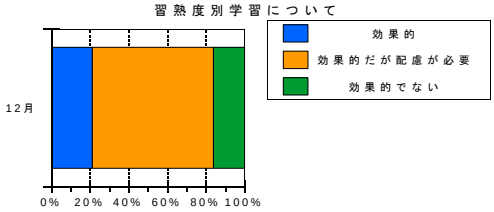
評定４，５の伸び（１，２学期の比較）

学年教科	伸び率
３年：理科	１１％
１年：国語	９％
３年：社会	６％
１年：数学	６％
３年：数学	５％

上位５つ掲載

(2)　保護者への意識調査を生かした評価結果





１２月のアンケート結果から少人数指導やＴＴが効果的と答えた保護者が９４．９％，習熟度別学習には，配慮が必要であるが効果があると考えている保護者が８３．８％と多い。これは，多様な学習方法について保護者の理解が得られつつあり，学力向上フロンティア事業の浸透並びに宣伝効果が現れてきているものと思われる。

２．今後の課題

○　家庭学習等学習習慣の定着がもう一歩であるという結果が出た。授業における学習訓練に加え，裁量を活用したフロンティアの時間等をさらに充実させると共に，家庭との連携を図っていきたい。
○　観点別評価で多くの教科において知識・理解面が思ったほどの結果が得られなかった。これは，個に応じた評価の工夫により，生徒一人一人のつまずきの状況はとらえられたが，それを個別指導に十分生かされなかった結果と思われる。今後どのように一人一人に定着を図るかが課題である。
○　少人数指導やＴＴを実施する単元や機会があまりなかった学年や教科においては，観点別評価や評定においても伸びがみられなかった。今後は，すべての単元で見直しを図り，計画的に実施し，個に応じた指導に生かしていきたい。
○　個に対する適切な評価と指導のために，個人の既習内容の習熟度がより具体的にとらえられるよう，個人カルテの作成と導入を図っていきたい。
○　小・中・高の連携がまだ十分ではないので，相互研修を通して連携可能な単元の検討や教師間交流等についても研究していきたい。
○　授業参観や学校通信，ホームページなどを活用した研究成果の普及のあり方についてさらに工夫改善をしていきたい。
○　研究部会の研究内容が重複し，不明確であったため，研究内容を明確にし，より効果的に研究が進められるよう研究推進体制の見直しを図りたい。

Ⅳ　学力把握のための学校としての取組

１　「学力診断のためのテスト」（４月中旬実施）
(1)　目　　的：前学年における生徒の学力の定着状況と実態を把握し，今後の指導の方向性を見いだす。
(2)　実施内容：国語，社会，数学，理科，英語による学力検査
２　学習に関する実態調査（第１回：６月上旬実施）
(1)　目　　的：学習に対する生徒，保護者，教師の意識と実態を把握し，学力向上対策の方向性を見いだす。
(2)　実施内容：学習に関する実態及び意識調査を生徒，保護者，教師に分け実施する。
３　学習に関する実態調査（第２回：１２月中旬実施）
(1)　目　　的：学習に対する生徒，保護者，教師の意識と実態の変容を把握し，学力向上対策の改善と方向性を見いだす。
(2)　実施内容：学習に関する実態及び意識調査を６月と同じ質問内容で生徒，保護者，教師に分け実施する。
４　観点別学力検査（２月中旬実施）
(1)　目　　的：１年間の生徒の学力の定着状況と実態及び評価規準の整合性を把握する。
(2)　実施内容：国語，社会，数学，理科，英語による観点別学力検査

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

１　研究発表会：平成１５年１１月１２日（水）明野中学校
　対象は県内小中学校及び保護者，地域住民で，本校の研究成果の公表と普及，今後の研究の方向性を探るために実施した。
　平成１６年１１月１２日（金）明野中学校で実施予定
２　県西地区協議会での発表：平成１６年１月２１日（水）明野町中央公民館
　対象は教育関係者及び保護者代表であり，本校の研究成果の公表及び普及を目的とした。
３　現在平成１５年度の研究についてのホームページを作成中である。
４　学年末ＰＴＡ説明会：平成１６年２月２６日（木）明野中学校で実施予定
　対象は本校保護者であり，１５年度の研究成果の説明と保護者への啓発を目的とした。

◇　次の項目ごとに，該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　☑１５年度からの新規校　☐１４年度からの継続校

【学校規模】　☐３学級以下　☐４～６学級
☐７～９学級　☐１０～１２学級
☐１２～１５学級　☑１６学級以上

【指導体制】　☑少人数指導　☑Ｔ．Ｔによる指導
☐その他

【研究教科】　☑国語　☑社会　☑数学　☑理科
☑外国語　☐音楽　☐美術　☐技術・家庭
☐保健体育　☐その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　☑ 有　☐ 無